二四、歴史のリズム

エリゼ・ルクリュはその最後の傑作『L' Homme et la terre』第一卷（拙譯『地人論』）に『歴史のリズム』という一章を置いて、彼の歴史論を詳記している。いまその中から數節を摘錄する。

一　時代の變遷の法則　諸時代は繼續狀態を以て進んで行く。瞬間毎に、衰耗の細胞を取り去り、瞬間毎に、新らしい細胞を取り來り、諸々の個は生命に生れて死滅に代替する。されば、進化の運動は無刺戟狀態を以て行われるが、しかし、それを數年、數十年、または數世紀の間隔を置いて研究する時には、各個の、そして各個の思想の、概觀に於て、各々相異せる相貌が區別される。即ち社會は同一方向を追求しはしない。他の步態を保ちて新らしい方向を示す。各時代は『禾本植物の各節の樣に』相互に區別される。鋸で切斷する樹木には、毎年生長の木芽を見る。それと同樣に經過せる諸世紀は、相次げる飛躍や、緩徐たる又は突如たる前進や、外觀上の停止

と遲滯やを表示するものである。

こうした人類の一般的運動や集團の特殊的步調やに於ける種々相は、抑も無法則に遇發的に行われるか、或はそれとは反對に一定の規律を以て成就されるものであるか？　指導的諸思想の連繼と、それより流出する事實の連續とは、恰も振子が規則正しく交互的動搖をするように、一種のリズムを以て行われるかの如く見える。諸種の學說はこれ等の變化を解說しようと欲した。例えばヴコ（Vico）は、その著『新科學』(Scienza Nuove) に於て、諸社會は諸時代連續のあいだ、Corsi と ricorsi とを以て、換言すれば規則的な進步と退步とを以て進化し、時間の中に輪を描き、その圓周を一周する毎に同一狀態をくりかえすことを說示する。これは、その單純性に於て些か小供らしき考え方である。ヴコの弟子にして、これを修正せずに是認し得たものはなかった。即ち歴史の或る時代を寸分違わず再現する如何なる他の時代をも見出し得ないことは餘りに明白である。地理的、經濟的、政治的、社會的の諸狀態は一定の顯著な類似點を呈し得るが、しかしながら、その形勢の總觀は、人類の廣大な組織體に無限に生起するところの動と反動とから由來する本質的の差異を現わすものである。またこの世の中を單なる往と來とに、流と反流との連續に、比較することは止められた。そして、絶えず擴大する圓輪が時代の行程に連れて不定に

發展するところの『文明の螺狀線』を說くことを一層喜ぶ。

しかしながら、こうした螺狀線は、極めて僅かしか幾何的形體をなさず、且つ各種の出來事はその圓曲線を屈曲させるものであることを附言せねばならぬ。また野蠻に還えつて行く或る地方の或る時代には、その螺狀線は大きさを增して行く代りに却つて縮まることさえある。されば、歷史事實のリズムは非常に複雜な法則に應合すると云うべきである。そして、ただ單なる言語の綾として、それを規則的な旋回や振子動に比することを許すべきである。その眞實であることは、部落、民族、國家等の諸種の人間集團は、多くの點に於て、動物や植物の如き生命の諸現象を表現する。即ちそれ等は生長し、强大になり、衰頽し、死亡する。そして深く研究すれば、諸種の社會は互に相錯節し、諸制度、諸宗教、諸道德、諸文明は自然各自の領分に互に侵入するが、しかもこれ等總ての現象に對しては、一般的方式の分類法を以て分類し得る諸原因が指示される。されば、こうした比較研究のお蔭で、或る社會の定一の進化は、その避くべからざる結果が如何であるべきかを類推によつて豫言せしめる。

部落または民族というような人類集團の發達に最も好適な條件は、その集團か、平和にしかも孤立でなく、訪客の交換を頻繁にし、隣人との關係を活潑にし、且つその上に、各個人が土地と勞

働との分前を持つて生活することにある。さうする時は、集團の自由と價値とが減少すべき何等の理由も存在しない。否なその集團は、常規的に發展し智能に於て道德に於て進步すべき大好機會を有する。それとは反對に、或る社會が狂熱的戰爭に投ずる場合には、その社會は恐るべき總てを有し、遂には不幸が到達するであろう。負ければ、その社會は屈從し、卑下し、自分達を殺戮し掠奪したる勝利者に媚びなくてはならない。勝てば、その社會は優勝の首長等を稱揚し、他の市民等の上に高揚し、それに特權を與え、その結果として惡事をなすの機會を與えるであろう。すなわち反動の一紀元は必ずやそれに次いで來るであろう。そして、その勢いは、諸酋長中の酋長、帝王、自己の爲に全人の自由を奪うところの絕對的主君の公宣というところまで到達するであろう。戰爭の神に惠まれた國民が、或は直接の略取により、或は植民によつて、その領地の面積を增加し、そして劣等と稱せられ、または奴隸にまで引下げられた住民の主人となるであろう程度に從つて、その不幸は益々大きく、益々永續的であろう。武力による併呑が狹くても、廣くても、町でも部落でも、王國でも、その武裝的强奪が、その不正な占領者に齎らす不幸な結果は少なくないであろう。その勝利は勝利者自身の罪惡、即ち殘虐、正義の拒否、暴力、殺戮等の威力を以てせねば保持し得ぬであろう。

しかしながら、或る社會が精神的崩潰狀態に墜落する危險に遭遇するには、侵畧的戰爭をなし、または外國の土地を略取することが必要ではない。否な、その社會そのものの內部に常住的分裂が生起して、遂に敵對の階級や、前代よりの相傳的仇敵黨派やが成立するに至れば充分である。幾つもの黨派が權力を分割するか、或は唯一の黨派がそれを保持するか、血統上の特權或は財產の威光により、また武力によつて『優良者』となつた『貴族』等が、群衆の上に命令する權利を僭有するか、或はまた、何人よりも强權を貪望する僧侶等が、心靈と身體との二重の所有を追求するる時は、隱然たる或は公然たる戰爭が、社會の諸部分間を支配し、そして退步の强力な要素が進步の總ての原因の上に勝利しようとすることは確かである。彼等は時に勝つことがある。そしてその場合には、その事件と他の同樣な狀態に於て生起する事件との、歷史的の併行が明證され得るであろう。その現象は、他方の世界にそれと双對の事實を有することさえある。東洋と西洋とに於て、相應合する同樣の形勢は、當然に同樣な形式を以て開展し、その結果として、歷史哲學者フェラリ(Ferrari)は、支那と歐羅巴とが表示する狀勢の類似を法則に樹てようと欲した。環境の反對から由來する本質的相違にもかかわらず、兩文明の一般的動搖は著しく類似せる週期性の曲線を以て劃されている。

二　文明進化の諸典型　諸文明を深く研究すると、特徵ある進化の諸種の典型を識別することができる。或る國民は殆ど突如として歷史の舞臺に現われ、一氣にして世界文明に參與すると同樣に、他の國民は徐々に或は急速に、靜穩に或は激動を伴つて、一過程を經て生から死へと經過する。

近時の發見により、誇らしき榮華を吾々に示すところのポタミヤ人が遺せしものは、かのバビロン及びニニウの名を有した曠漠たる平野の中の墳墓よりほかにはない。宗教裁判制と暴壓制とはかのモオル人の影響のもとに異常に發達した美しい都市を、急速に無人の荒野 Despoblados 及び dehesas と化したではないか？　一七七〇年にクックが最初に航行した時は、なお七千人を數えたタスマニヤ人は、百年ばかりの間に組織的に亡ぼされ、この國民の最後の男子は一八六九年に絕命し、一八七六年に最後の女子が歿した。それは急激な死であつて、今日アルメニヤ人等が遭遇する死滅もそれなのである。若し夫れ、太平洋からアフリカ大陸に至る諸島以下、パアク島からカロリン及びヂムバブエに至るまでの間に散在する記念物を建立した諸部落民の名に至つては、此頃書かれたる歷史的結論中に存するに過ぎない。その他、ただ漠然たる徵證によつて

のみ吾々に想起される文明が、どれほどあるか知れない！

比較的健康狀態から疾病狀態への過程に於てまた進化が生起する。エヂプトは確に亡びてはいない。けれども吾々がそれを、神の强大な子女として出現したのを見て以來、その生存上に於ける相次げる變化と苦惱の時期とがどれほどあつたか！　ギリシヤや、支那や、印度は、その歷史上の或る時期に於ける如く指導的國民ではなくなつた。しかも、その活力ある要素は他方に於ける如く此處に缺けている譯では決してない。全然その自由を喪いながらも、その人々が急激に增加するところの國に就いては何と言うべきか？

歷史進行上に於ける第三の過程は、進化の一形式から他の形式えの經過を吾々に示す。例えば現在のロオマの持つ光輝は、古代のロオマ、帝國のロオマ及び法皇のロオマが外方に動きかけた作用とは全然異なつたものである。吾々はここに一有機體の生活力の典型的實例を持つ。それは重病の中にも要素を保持し、斷末魔の如く見えた後に新たに更生するのである。

最後に交換進化（Intervolution）ということがある。それは即ち自然の成行によつて、或る諸々の民族が今日宿命的に交互に混入し合うことで、それによつて殆ど彼等に新らしい生命が吹きこまれるのである。例えばラテン民族はその頽廢を悲しむような上品なものであり、實際に沒落

したにしても、ただ優越者と評判せられる隣人等との密合によつて必ずや健康人たる美しい衡平狀態を回復し得るであろう。歐羅巴の文明は、獨特な活動方式を有する日本人の參加によつて新らしい血を注入されている。最後の紅皮民族はアメリカ人の血管中に引き入れられる。總ての民族は『ダンスに仲間入りし』そのより良き分子がそれを强硬に洗練する。今後はもはや、地球全體としてでなければ進步の問題は存在しない。……中略……

三　新歷史科學　早晩、歷史は二つの時代に分たれるであろう。即ち、アンシクロペヂストが既に言つたように偶然及び野蠻蒙昧の時代と、科學或は理性の時代とに分たれるであろう。近代史を『改革』の時代にまで遡らしたのは餘り早すぎた。（註）その改革の時代には、自ら眞理を把握すると信ずる人々が威力を以てその改革の活動を壓しつけようと欲したのである。『人類は總ゆる可能の方式で逆行を試みた後でなければ眞直に進むようにはならない。』（スペンサア）

（註）Elie Reclus "Notes manuscrites"

純粹に人類的なこの新らしい宇宙に於ては、歷史の研究は、もはや往昔の如く、諸事件の變遷

を自分の都合にて變更するところの奇蹟の神の干渉を含まず、又かの普通の人間の外に置かれ、自己の才能によつて尋常事の過程に服從することを免れる或る傳說的人物をも含まない。爾後、人類發展に就いての科學は他の諸々の知識的規律と同樣な方法に依據せねばならぬものである。その科學は、精確なる考察、嚴密公平なる比較により、また時間と空間との中に注意深く順序だてられた事實の分類によるの他には、進步しない。

こうした長い勞作によつて歷史家達が到達するであろう法則——或は少なくとも一般的吟味法——が如何にあろうとも、彼等は既に些かの例外なしに看取した、諸事件の連鎖が飛躍と休息との更替により、發動と反動との繼承により、或はまたギコが言つたように、『順流と逆流』と、滿潮と干潮との連續によつて成立することを。人類と民族とは『一と廻りして軈て立ち去る』しかし彼等は常に一層廣大な圓週に於て再來する爲に立ち去るのである。

歷史的時代の發端より以來、その振子運動の大きさは絕えず擴大されて來た。そして多くの地方的リズムは徐々により大なるリズムに混合して來た。即ち諸都市の最も下層な生活の更替を繼承して、もつと一般的な國民の振子動、それから世界的の大動搖が續き、同一運動に於て地球全體とその民族とを震動せしめる。かくて週廻また再週廻とその廣さが擴大される間に、他の皷動

は逆の方向に成立して各個自ら發意の中心となり、その生活を、都市や、國民や、世界やのより廣き社會と調和的に規則だてる。社會はアリストテレスの言うやうに無數の意味に於て『巨人』である。しかしながら、この巨人は、現在の瞬間の『デリケートな吟味』(ゴビノオ)や、個人々物の種々細密な分解によらねば、自ら了解されないものである。

二五、美の革命

△藝術　ルクリュが裸體美論を强調したのは、それが社會革命として、今日流行している經濟革命よりも極めてデリケートな困難な事業であり、しかも裸體美の承認が吾々の自由社會の道德的健康を回復するために缺くことの出來ない重要素だと考えたからである。

「凡そ人間の『美』という印象は、ものの分類や順序の感覺よりも先きに來るものである。言葉を換えて言えば、藝術は科學よりも先きに來る。子供は輝やいた色の光つた物を手に持つて歡喜する。優美なるニュウアンスと音とを以て音樂を奏する。小兒がその玩具のどうして？　なぜ？　を知ろうとするのは、もつと後のことである。……そして吾々が自分の周圍の諸物を了解した時、即ち科學が總てを說明した時、吾々はなおそれを讃美すべく、またその喜びを吾々の生活に徹底すべく、再び藝術に歸つて來る。藝術の第一法則は、總ての德と同樣に、誠實であり、また自發的、人格的であるということである。」

しかるにその藝術の發達を妨害する强權がある。それは單に君主とか權力階級とかばかりではない。無智な輿論なども、その一種だ。その美の自由のために、どんなに多くの藝術家が苦鬪して來たか。ベルナール・パリシイはそのために死刑にまで處せられた。バイロンやシェレーの樣に、その祖國に容れられないで外國で死なねばならなかつたものが幾人あつたことか。宗教的道德的の僞善が——殊にアングロ・サクソンの國で——なせる害惡は計量することが出來ないほどである。それは性慾と肉體とに關する問題である。この點に就ては、近代社會はかの崇高なギリシヤ時代に劣ること多大だ。ギリシヤ藝術と肩を比べるほどの彫塑術の復活は道德的虛僞の流行と俗習とがその習慣を男女に强要する間は考うべくもない。

× × ×

△被服と裸體　しかし今日の吾々の心身の生活は既に歪められている。從つて苟も疾ましい心持や、習慣に歪められた裸體の姿勢は、完全に自由な生命の充實した身體とは言えない。人間が惡ということを全然知らないか、または事物の完全な崇高な認識によつて魂の生命の純潔にまで高上しない限り、その裸體は完全に美ではあり得ない。

衣服と裸體との問題は、肉體的健康の、また藝術の、そして道德的健康の觀點よりして最も重

大な問題であることは確かだ。極めて最近まで凡そ衣服の必要を否定する主張なぞは人倫道德を破壞するものとして排斥された。宗教によつて神聖化され、しかも理由の分らない思想の影響によつて、衣服は禮儀の尺度でもあるように所謂文明社會人は考える。優雅な婦人は裸足で歩くものなぞは見ないふりをする。大多數の基督教婦人は唯だ流行という暴君に强制せられて、マホメット婦人のように覆面まで施すに至る。

ところが場合が變わると反對なことが禮儀になり、婦人方が肩も胸もあらわに露出して一ぱいの光を溶びて公衆の前に現われる。昔シャルル・カン王がアンベルスの町に來ると、最も高貴な家庭の婦人達は裸體にてその行列に加わる名譽を得ようと爭つた。

問題は、裸體と着服と何れが衞生的であるか、にある。衞生學者にとつて、裸體が健康的であることは既定の事實である。皮膚が大氣中に、光明の中に、戸外の變化多き現象の中に自由に曝露される時、その活力と活動とを回復することは爭うべくもない。宣教師達が肌衣や布を持つて來なかつた以前のポリネジヤ人は最も美しい人間であつた。どこの美術家も、かの大空の下で群衆の前で若い强壯者が殆ど裸體で角力し、競走し、競技したところの素晴しい希臘に於けるほど美というものに就て最も高尙な理解を持つたものはなかつた。今日の衞生學者達が、危地にある

人間の美と健康とを回復するためにその患者達を大氣と光線とに馴れしめるべく脫衣させることを始めたことは何人も知るところだ。英人の僞君子的風習に傷けられなかつた日本人は、最近まで肉體を被うことを義務とされず、共同の入浴を行つた。日本の美術家達が筆先の技術に於て自由にその運動を描寫し得たのは、筋肉や肢體の自由活動を目擊し得たからである。

× × ×

△美的革命　「人間の體軀が被服から解放されない限り、健康の均衡、身體の正當な作用は完全に回復されず、寒暑の變化から來る疾病は、常に文明人を脅威し續けるであろう」

「しかし、裸體美の承認が必要であるのは、殊に道德的觀點に於てである。なぜなら、衣服や裝飾の技巧は、愚かな虛榮心や、摸倣の奴隸的精神により、殊に邪心の樣々な狡術によつて、社會の全般的の腐敗を招致することが最も多大だからである。」

「流行(モード)は服裝に、特に羨望を挑發すべき泉を與えた。裸體は崇高にし、純潔にする。陷穽的な欺瞞的な衣服は墮落させ、腐敗させる。」

被服上の自由は既に或る點まで得られた。けれども、昔のギリシヤ人が持つていたところの、太陽の下に肌衣を脫いで散歩する權利を近代文明人に與えるであろう美的道德的大革命は、近代

人の總ゆる野心中で、その實現の最も困難に見ゆるものである。

以上はエリゼ・ルクリュの裸體美並に美的革命に關する所論である。（『地人論』第六卷四七九頁―四九一頁）